様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２２３３

研究課題名（和文）家族同意に基づく非自発的な精神科入院の歴史的研究―精神衛生法下における同意入院―

研究課題名（英文）A Historical Study of Involuntary Psychiatric Hospitalization Based on Family Consent: Consent Hospitalization under the Mental Hygiene Act

研究代表者
後藤　基行（GOTO, Motoyuki）

立命館大学・先端総合学術研究科・講師

研究者番号：７０７２２３９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：covid-19により調査対象施設に制約が生じ、国立肥前療養所(現国立肥前精神医療センター）の歴史的研究に軌道修正を行った。
同所に保管されている一次資料を分析した結果、1950年代後半に伊藤正雄所長の下で行われた大規模な開放的患者処遇の実態として、開放的患者処遇が行われただけでなく、入院形式として自由入院が重視され、伊藤退任から20年経てもそのインパクトが継続していたことが判明した。伊藤による改革は彼の退任後の閉鎖病棟の再増加により失敗したと結論付けられることが少なくないが、全国平均から突出した自由入院の多さが継続したという意味で伊藤は退任後にも大きな影響を残していたことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
精神科医療の入院先が閉鎖病棟であるか否かは、自己決定を重視する現代的患者像にとって重要な論点である。本研究では、1950年代後半に戦後初の大規模な開放的患者処遇を行った国立肥前療養所について研究を行った。その結果、肥前療養所では開放処遇のみならず、自由入院も多くなっており、かつ自由入院の多さは改革終了後も長く続いた。このことから、精神科医療機関の開放的処遇及び自由（任意）入院の増加にとって、責任者による改革の意思決定が重要であることが示唆された。しかし肥前の改革は上からの「開放化」であり、当時の病院や医療改革が、患者不在を自明視する中で行われてきたことも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The covid-19 placed restrictions on the facilities to be surveyed, and the National Hizen Sanatorium (now the National Hizen Psychiatric Center) was revised in the course of historical research.
As a result of analyzing the primary data stored at the center, it was found that not only was open patient treatment conducted in the late 1950s under Director Masao Ito, but that free admission was emphasized as a form of hospitalization, and that the impact of this continued even 20 years after Ito's retirement. The reforms by Ito were not only implemented after his resignation, but also after his retirement. It is not uncommon to conclude that the reforms made by Ito failed due to the re-increase of closed wards after his retirement, but it was found that Ito had left a significant impact even after his retirement in the sense that the high number of free admissions, which stood out from the national average, continued.

研究分野：歴史社会学

キーワード：肥前療養所　開放医療（開放管理）　自由入院　閉鎖病棟　精神衛生法　同意入院

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年日本では､精神科における非自発的入院の一形態である医療保護入院が 2005 年の約 12 万件から 2015 年の約 18 万件と相当な増加傾向であり、患者の自己決定や自由意志の尊重という観点からみて看過できない状況が生じている。このため、戦後日本の精神科入院における「家族同意にもとづく強制入院」を歴史的に考察するため、現行医療保護入院の制度的前史である精神衛生法下（1950-87）の同意入院についての研究を行う重要性があった。

２．研究の目的

第一に、精神病床・入院急増期である 1950 年代から 80 年代頃の同意入院についての実像を明らかにすることを目的とする。第二に、この同意入院は、これまでの代表者の研究により医療扶助の適用が多かったことが判明しているが、これが特定医療機関においても同様であるか、また同様である場合それはいかなる要因がそれをもたらしているか、同様でない場合はその理由を検証する。本研究を通じて、同意入院の実像を明らかにし、合わせて戦後日本の精神医療供給にもたらした歴史的意味について考察することで、先行研究の蓄積の少ない同意入院の基礎的研究となることを目指す。

３．研究の方法

本研究では、当初複数の医療機関の資料を利用することを検討していたが、covid-19 の流行により実施できなかったため国立病院機構肥前精神医療センターの資料に集中することとし、同センターが保管している歴史的な精神科診療録や患者名簿・退院名簿等を対象とした。また、行政機関作成資料として、佐賀県公文書館などが所蔵している同意入院に関係する行政文書群および、地方自治体が主に発刊している統計類を対象とした。

４．研究成果

本研究企画においては、当初精神衛生法下における同意入院に関する一次資料を利用した実証的研究を行う予定であったが、コロナ渦により各方面への資料調査が困難となり、データ収集に制約が生じた。しかしながら、むしろ資料調査対象機関が限定されたが故に、最終年度において当初からの候補であった肥前精神医療センターへの集中的調査を行うことになり、これに伴う成果が得られることとなった。特に現肥前精神医療センターはその前身たる国立肥前療養所時代の 1950 年代において、戦後日本の中ではごく先駆的な「開放医療」（開放管理）を当時の伊藤正雄所長の下で実践しており、この時代前後の資料調査と分析を重点的に行うこととなった。

その結果、1950 年代後半の国立肥前療養所では全国平均と比較して突出して高い割合で開放病棟内での患者処遇を行っていたことが当時の論文から確認された。また、『患者名簿』や『退所願綴』の分析から肥前療養所の 1960 年度における自由入院割合は約 80%であり、やや時期が異なるものの 1966 年の全国平均の約 11%と比較して非常に多く、かつ肥前は 1980 年度になっても約 67%が自由入院で、同じく 1975 年の全国平均の約 19%と比べて高くなっていた。すなわち、同時代における入院形式の圧倒的中核であった精神衛生法下の「同意入院」の適用がごくわずかで、その運用が意図的に差し控えられていたことが分かった。

このことから肥前療養所の開放管理は病棟の運営方式のみならず、同意入院のような非自発的入院ではなく自由入院を重視する改革を伴っており、かつ伊藤退任後にも持続的な影響を与えていたことが明らかになった。また、1960 年と 70 年度の『退所願綴』から医療費支払区分別、入院形態別の在院期間を分析し、これまでの研究と同様に肥前療養所でも生活保護での入院が長期化していたことが分かったが、伊藤在任中においては生活保護入院患者の退所も少なくなかった。一方で、自由入院で入所した患者が多数となったため、在院期間において同意入院で入所した患者よりも自由入院の患者のほうが平均も中央値も長くなっていた。このことから、病状が重い患者であり、在院期間の短縮が困難だったとしても、入院時の入院形式を強制入院型から自由（任意）入院型に変更することは病院管理者の主導によって可能になると思われた。

そのほかにも、1960 年の開放管理期においては、入院患者の退所率がその前後の時期よりも有意に高くなっていることや、患者の在院期間の中央値が 79 日とやはり前後の時代より 100 日以上短縮されていたことが当時の一次資料より裏付けられた。

現代の精神科入院において自発的入院であるか否か、閉鎖病棟であるか否かは、国連の障害者権利委員会の指摘を参照するまでもなく、患者の自己決定を重視する現代的患者像からすると重要な論点である。そして、本研究でみてきた国立肥前療養所は、伊藤正雄所長の下で 1950 年代後半に行った開放管理によって閉鎖病棟を大々的に廃止したのみならず、自由入院を奨励してきたことが新たに数字から裏付けられた。この意味においても、改めて現代的患者の有り様にとって肥前療養所は、日本の精神科医療に関わる戦後史における重要な先駆例といえよう。

伊藤による改革は彼の退任後に早々に失敗したと結論付けられることが少なくなく伊藤への評価も分かれているが、しかし、より長期の患者の入退院データを見ると、特に自由入院に関わる改革のインパクトは今回分析できた 1980 年まで十分に観察できる。確かに、開放病棟の患者

割合は伊藤退任後に急速に下がったとは言え、全国平均から突出した自由入院の多さが継続したという意味で伊藤は退任後にも大きな影響を肥前に残したといえるだろう。当時、医療スタッフが非常に限定的であったことは明らかだが、そのような制約下においてもリーダーの主導によって大きな医療改革が可能であること、またその影響が一時的なものにとどまらなかったことが分かった。このことは冒頭に述べたように、現在の日本の精神科医療において非常に多くの非自発的入院があることを考えると、医療機関の責任者による改革の意思決定が重要であることが改めて肥前の歴史からは見えてくるであろう。

しかしながら、翻って、この時代の肥前療養所に関わる資料の中からは、自己決定を行い自ら療養するような主体的患者の姿は浮かんでこない。肥前の改革が上からの「開放化」だった側面は否めない。ただし、このような患者不在の傾向は、当時の肥前にのみ特徴的なわけではなく、この後に続く精神科医療改革の歴史においても基本的には同様だったと考えられる。肥前をはじめ 20 世紀後半期に行われた精神医療改革の歴史を振り返ることの重要な意義の一つは、当時の病院や医療改革が、患者不在を自明視する中で行われてきたことについての反省を現在に迫ることであると考える。

以上のように、現在の肥前精神医療センターには各種の貴重な運営資料、すなわち医療診療録その他の医療アーカイブズが多数保管されており、これらのうちで精神衛生法時代の資料を分析することで、同意入院や自由入院の同所における運用を含め、これまで二次研究がほとんど行われたことがなかった先駆的な肥前療養所の開放医療の一端が一次資料から明らかになった。なお、これらの成果の一部は、2023 年度の『保健医療社会学論集』の特集号において論文化される予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 後藤 基行	４．巻 25
２．論文標題 社会の中の歴史研究とアーカイブズ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神医学史研究	６．最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本村啓介	４．巻 5
２．論文標題 メランコリー親和型と社会；精神医学史研究に向けて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神医学の基盤	６．最初と最後の頁 36-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本村啓介	４．巻 50
２．論文標題 疾患概念論温故知新；現代の疾患概念論によってKurt Schneiderを批判する	５．発行年 2021年
３．雑誌名 臨床精神医学	６．最初と最後の頁 653-664
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒木俊秀	４．巻 22
２．論文標題 DSM診断は＜心＞の病名だろうか	５．発行年 2022年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 3-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北中淳子、黒木俊秀	4．巻 22
2．論文標題 ＜心＞の病名と精神医学をめぐる対話	5．発行年 2022年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 8 - 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 後藤基行，安藤道人	4．巻 122
2．論文標題 生活保護による精神科長期入院―1956年『在院精神障害者実態調査』原票の分析―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 精神神経学雑誌	6．最初と最後の頁 261-281
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 黒木俊秀	4．巻 62(6)
2．論文標題 精神科診断におけるスペクトラム概念	5．発行年 2021年
3．雑誌名 精神医学	6．最初と最後の頁 867-874
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保田明子	4．巻 16
2．論文標題 広島における原爆被災の映像と相原秀二資料について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告	6．最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保田明子	4．巻 95
2．論文標題 「捨ててええんよ」被爆資料の75年	5．発行年 2020年
3．雑誌名 長崎医学会雑誌	6．最初と最後の頁 230-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒木俊秀	4．巻 38
2．論文標題 誰が自閉症を発見したか？－アスペルガーとカナーをつないだ二人、フランクルとワイス	5．発行年 2022年
3．雑誌名 そだちの科学	6．最初と最後の頁 25,31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒木俊秀，古茶大樹，西岡和郎	4．巻 125
2．論文標題 精神医学古典の展望－連載にあたって－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本精神神経学雑誌	6．最初と最後の頁 151,157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒木俊秀	4．巻 23
2．論文標題 中井久夫と発達精神病理学－『DSM-V研究行動計画』（2008）の共訳作業を振り返る	5．発行年 2023年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 190,193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 本村啓介	4．巻 37
2．論文標題 「これが本当の私です」急性躁病における非自発的入院と臨床的ディレンマ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 精神科治療学	6．最初と最後の頁 60,64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 後藤基行
2．発表標題 医療ヘルスケアアーカイブズの諸問題と公共性
3．学会等名 【立命館大学生存学研究所主催シンポジウム】医療ヘルスケアアーカイブズの保存と利用に関わる諸課題と当事者参加
4．発表年 2022年

1．発表者名 後藤基行
2．発表標題 医療・ヘルスケア政策史研究と医療アーカイブズをめぐる諸課題
3．学会等名 第33 回日本生命倫理学会年次大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 後藤 基行，中村 江里，竹島 正，三野 進，太田 順一郎，中島 直，佐藤 眞弓，早苗 麻子，富田 三樹生
2．発表標題 公文書にみる旧優生保護法の運用実態と精神科医
3．学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会
4．発表年 2021年

１．発表者名 久保田明子
２．発表標題 医学研究所のアーカイブズについて：広島大学原爆放射線医科学研究所の状況
３．学会等名 【立命館大学生存学研究所主催シンポジウム】医療ヘルスケアアーカイブズの保存と利用に関わる諸課題と当事者参加
４．発表年 2022年

１．発表者名 Iida, K. and A. Kubota
２．発表標題 The Research Institute for Radiation Biology and Medicine and ABCC in Hiroshima: How they collaborated with and also differentiated from each other
３．学会等名 The 6th International Symposium of the Network-type Joint Usage（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 本村啓介
２．発表標題 躁病エピソード
３．学会等名 第18回　日本うつ病学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 本村啓介
２．発表標題 執着気質とその時代
３．学会等名 第25回日本精神医学史学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 本村啓介
２．発表標題 躁病エピソード
３．学会等名 第19回日本うつ病学会総会
４．発表年 2022年

１．発表者名 後藤 基行，中村江里，竹島正，加藤 春樹，三野進，太田順一郎，富田三樹
２．発表標題 優生手術への精神科医の関与―学会員を対象とした質問紙調査―
３．学会等名 第118回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計7件

１．著者名 松本俊彦、佐久間寛之、蒲生裕司 編（本村啓介）	４．発行年 2021年
２．出版社 文光堂	５．総ページ数 437
３．書名 やってみたくなるアディクション診療・支援ガイド	

１．著者名 日本ソーシャルワーク教育学校連盟編集、（後藤基行）、石井美緒、伊藤秀幸、伊予雅臣、臼杵理人、臼田健太郎、大山博史、木村敦史、木村大、柴崎聡子、白石弘巳、先崎章、木下裕久、竹島正、塚本哲司、中川賀嗣、中根秀之、西尾雅昭、波田野隼也、藤井千代ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 中央法規	５．総ページ数 354
３．書名 最新 精神保健福祉士養成講座１ 精神医学と精神医療	

1．著者名 井原裕、斎藤環、松本俊彦編、（黒木俊秀）、熊倉陽介、榊原英輔、大石智、井上祐紀、藤川大祐、神田橋宏治、姜昌勲、市来真彦、三ツ井直子、伊藤絵美、来田誠、吉村健佑、岩室紳也、植村太郎、立岩真也	4．発行年 2021年
2．出版社 日本評論社	5．総ページ数 192
3．書名 こころの科学増刊：コロナ禍の臨床を問う	

1．著者名 大森哲郎ほか編、（本村啓介）、（黒木俊秀）、功刀浩、中川伸、上敷領俊晴、岡田剛、高村真広、市川奈穂、岡本泰昌、仙波純一、笠井清登、西川徹、谷口賢、齋藤竹生、池田匡志、岩田仲生、豊島学、原伯徳、吉川武男ほか	4．発行年 2021年
2．出版社 学樹書院	5．総ページ数 200
3．書名 精神医学の基盤5：精神医学における仮説の形成と検証	

1．著者名 日本医史学会	4．発行年 2022年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 836
3．書名 医学史事典	

1．著者名 高岡健	4．発行年 2020年
2．出版社 批評社	5．総ページ数 296
3．書名 隔離・収容政策と優生思想の現在	

１．著者名 岩壁　茂、遠藤　利彦、黒木　俊秀、中嶋　義文、中村　知靖、橋本　和明、増沢　高、村瀬　嘉代子	４．発行年 2023年
２．出版社 金剛出版	５．総ページ数 1000
３．書名 臨床心理学スタンダードテキスト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2023年度の『保健医療社会学論集』の特集号において後藤基行「国立肥前療養所における開放医療と患者－『患者名簿』・『退院願綴』からみる入退院パターンの分析－」が論文として発表される予定である。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	黒木　俊秀 (Kuroki Toshihide) (60215093)	九州大学・人間環境学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	本村　啓介 (Motomura Keisuke) (60432944)	独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター（臨床研究部）・臨床研究部・精神科診療部長 (83105)	
研究分担者	久保田　明子 (Kubota Akiko) (40767589)	広島大学・原爆放射線医科学研究所・助教 (15401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関